土車

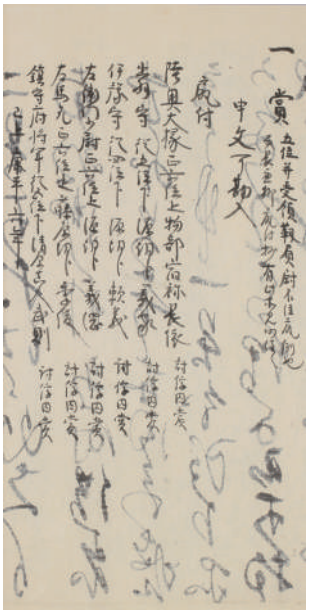
第　146　号

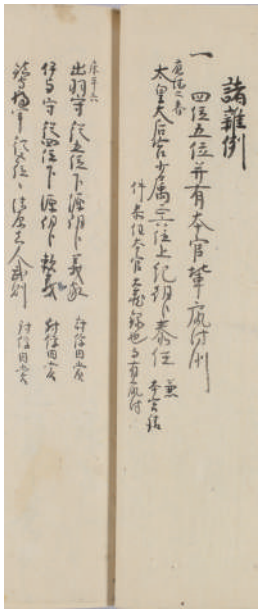
―令和４年12月20日発行―

公益財団法人　古代学協会だより

古代学協会所蔵『魚魯愚鈔』に記された前九年の役の行賞

康平六年（一〇六三）二月二五～二七日の除目では、前年九月に陸奥国の厨川柵（現盛岡市内）の合戦に勝って戦役を終結させた源頼義等に官位を与える行賞が併せて行われた。『魚魯愚鈔』の記事を古代学協会所蔵本から紹介しよう。同書は洞院公賢（鎌倉末～南北朝期の公卿）が晩年に著した除目書であり、当協会本は三条西実隆（戦国期の公卿）が明応三年（一四九四）に書写した写本である（京都文化博物館寄託品。東京大学史料編纂所画像提供）。





写真右は巻第八、「雑々自解任人例」の「賞」の段。物部長依を陸奥大掾、源義家を出羽守、同頼義を伊予守、同義綱を左衛門少尉、藤原季俊を左馬允、清原武則を鎮守府将軍に任じた人事が「討俘囚賞」であると各人に注記し、「已上康平六年」と記す。義家と義綱は頼義の子で、従軍して戦功を上げた。文字が読み読みづらいのは、三条西家宛書状の紙背に書写したためである。写真左は同巻、「諸雑例」の「四位五位并有本官輩尻付例」の段。袋折りされた丁の表の冒頭に「康平六」の義家・頼義・武則の人事を記す（「討俘囚賞」の注記も含めて内容は同上）。

康平六年二月一六日、頼義が討った「俘囚」安倍貞任・同重任・藤原経清等三人の首が平安京に伝えられ、四条大路を西行、朱雀大路を北行し、西獄の獄門にかけられた。当時権中納言だった源俊房（二九歳）は、貴族・民衆が熱狂してその行列を見物したこと、希代の観であって朝廷の威光は古に恥じないと日記に書いた（『水左記』同日条）。そうした人々の有様は、戦争という愚行によって人間の心が操られてしまうことを物語っている。私達も決して無縁ではない。その一方で、貞任等を「とりこ」の意の俘囚と蔑称することは、『扶桑略記』と『百錬抄』の同日条にも見えている。延暦二一年（八〇二）に坂上田村麻呂が阿弖流（利）為を降伏させてから二六〇年経過した後冷泉朝にも、蝦夷の地の人々を夷俘・俘囚と見なす朝廷の国土統治観が生き続けていることを物語っている。

古藤　真平
（研究員）

映画の中の牛車

滋賀県立大学教授　京樂　真帆子

あの『源氏物語』は、何度も映画化されている。牛車を研究している私は七本の映画を確認したが、車争いのシーンを描くものは、このうち二本しかない。森一生監督「新源氏物語」（大映、一九六一年）と武智鉄二監督「源氏物語」（日活、一九六六年）である。牛車を複数台用意しなければならないので、実写撮影が難しいのだろう。

ここでは、森一生監督の映画を紹介したい。原作は、川口松太郎の小説『新源氏物語』（文藝春秋新社、一九六二年）。川口松太郎（一八九九～一九八五年）は、第一回直木賞を受賞した作家で、文化功労者にもなっている。川口は、「愛染かつら」（木村恵吾監督、大映、一九五四年）など多くの映画の原作者であり、「雨月物語」（溝口健二監督、大映、一九五三年）の脚本を書き、「新・平家物語」（溝口健二監督、大映、一九五五年）の企画に加わるなど、大映と組んだ映画での仕事も多い。『週刊文春』に連載された小説『新源氏物語』は「雲隠」巻までを扱うが、映画「新源氏物語」は光源氏の須磨行きで終わっている。

主人公の光源氏を演じるのは、当時三十歳の市川雷蔵。圧倒的な美しさで物語を牽引する。そして、二六歳の若尾文子が葵の上を、二九歳の中田康子が六条の御息所をそれぞれ好演する。

監督の森一生（一九一一～八九年）は時代劇を得意とする監督で、今は亡き大映の黄金時代を作った一人である。この他、脚色に八尋不二、撮影は本多省三、美術は西岡善信といった布陣で、時代劇映画製作のベテランが顔を揃えている。衣裳考証は上野芳生であるが、時代考証・風俗考証はクレジットされていない。

市川雷蔵の後援会機関誌『よしや』第二五号（一九六一年）に、映画『新源氏物語』製作について以下の文章が載っている。

「専門家に聞かなくっても、資料は大映京都撮影所にいくらでもある。だから王朝物というと実に正確にすべての部門が活躍するというわけ。（中略）新源氏物語のねらいは、時代考証は正確に感覚は新しくと云われている。」

かなりの自信である。

この映画ではないが、一九五一年の映画「源氏物語」（大映）の特報

図１「源氏物語」特報写真より（筆者所蔵）

五一八号では、光源氏役の長谷川一夫が、吉村公三郎監督、脚本の新藤兼人、美術監督の水谷浩と共に、絵巻物などを広げてにこやかに勉強している様が紹介されている。映画製作者の事前研究が、観客へのアピールにもなったということだ。

では、映画「新源氏物語」において、製作スタッフの研究成果が画面にどのように活かされているのか、牛車を中心に見ていこう。その際、映像（DVD、KADOKAWA）だけではなく、『時代映画』第七巻第九号（一九六一年）掲載のシナリオも参照したい。

まずは、シーンナンバー29「大路」。光源氏が、牛車に乗っている。車輪のきしむ音が、なかなかリアルである。乗っているのは、網代車。若い男性貴族が普段使いするのに相応しい車種である。車内には揺れた時などにつかまる「手形」も再現されていて、この牛車を製作したスタッフは、松平定信編『輿車図考』（一八〇四年）を参照していることがわかる。残念ながら、この「手形」を使っての芝居はないので、映画を見ている人には気付かれなかっただろうけれど。

このシーンで面白いのは、光源氏の視線からの映像があること、である。つまり、手持ちカメラを牛車内に持ち込み、内側から見える風景を映しだしているのだ。「牛車の中からはこんな風に見えるのか」とわかって、なかなか臨場感のある映像となっている。

ここまでは楽しく見てきた映画であるが、シーンナンバー57「六条院」車寄」では、あっと声をあげてしまう。牛車を榻を使わずに駐車させている。つまり、牛の胴にかける軛を立てかけておく椅子のような台（これを榻という）を使わずに、軛を直接地面に付けている。車体は三十度は傾いている。このシーンでは無人という設定だが、もし中に人がいれば前に転げ落ちてしまうだろう。また、軛に車体の全重量が掛かり、折れてしまうのではないかと心配になる。

これで、この映画の撮影スタッフ

が『輿車図考』の付図や、平安時代の様子を描く絵巻類を見ていないことが露呈した。

私が見るところ、大映は少なくとも五両の牛車を持っている。「新・平家物語」（一九五五年）において、一つのシーンに網代車が四両（書き割りではない）、別のシーンで絲毛車が一両映ることからそう判断できる。ということは、一九五五年段階ですでに五両の牛車が製作されていて、その際には『輿車図考』が参照されていたが、その後の映画撮影では、既存の牛車を使うだけでかつての資料は読み返されなかった、ということだ。

図２　映画「新源氏物語」のワンシーン
（DVD「新源氏物語」 KADOKAWA）より

ちなみに、一九五一年の映画「源氏物語」には榻が映るので、大映の倉庫を探せば、きっとあったはず。

さて、気を取り直して、車争いのシーンに進もう。

『源氏物語』では、御禊の見物にやって来た多くの牛車が、一条大路の両側にズラリと並ぶ風景が想定されているわけだが、映画では限られた数の牛車しか使えない。そこで編み出されたのが、T字路の横棒を一条大路に見立て、そこに向かって縦棒部分に車を横に並べる、という方法だった。これならば、道幅分に牛車を停めておけば様になる。映画では、三台の牛車が並べられた。周りにたくさんの従者や見物人がひしめいているので、混雑している様子がうまく表れている。

向かって一番右に半蔀車がいて、中には女性が一人座っている。真ん中の車は網代車で、男性が乗っている。一番左が六条の御息所と娘が乗る車で、この三両とも牛を付けたままである。榻を使うことを知らないスタッフなので、人が乗っているときには牛を付けていたのだと考えたらしい。映画では、このシーンが何度か撮り直されたようで、カット毎に牛車の並ぶ順番が違っていたりするが、それはまあよい。その中に、車の中に人を乗せずに撮影したらしき後方からのカットもあって、その時には牛を外して、軛をそのまま地面に付けるという例の方法で駐車させているので、車体が前傾姿勢になっている。が、これも、単なる勉強不足として見逃そう。

一番驚くのは、この六条の御息所が乗っている車が、なんと絲毛車だということである。しかも、『輿車図考』の絲毛車と全く同じ色、ほぼ同じ文様。アップで映った時に確認すると、糸を葺いて復元したわけではなく、板に色を塗っただけのようであるが、それでも遠目からは美しい高級車、絲毛車に見える。

『源氏物語』の原文では、六条の御息所は「網代のすこし馴れたる」車に乗っていた、と説明されている。いつもならば絲毛車や檳榔毛車で出かけるのだろうが、人目を避けるお忍びの見物なので、わざと乗り古した、いわば大衆車のような網代車で出かけたのだった。川口の原作小説でも「みすぼらしげな網代車」と書かれているし、シナリオでもシーンナンバー83「加茂のほとり」で「御息所母娘の網代車」とあるのに、なぜ絲毛車になったのか。

この三両の後方から、牛車が近づいてくる。葵の上が乗っている車である。『源氏物語』には葵の上の車についての描写はないが、原作小説では「華やかな車を用意させて」とあり、シナリオでも「豪華な車」となっている。六条の御息所と葵の上の車を描き分けることで、御息所が受けた屈辱とそれが怨念に展開する過程がわかりやすくなる。牛車の車種は、このシーンの肝ではないか。

なのに、葵の上が乗っている車は、豪華な車とは全く違う、どこにでもありそうな網代車である。どうやら撮影現場で、六条の御息所と葵の上の車の車種を逆にしてしまったらしい。

こうした映像を見ると、牛車の車種に無頓着なスタッフに言いたくなる。平安時代の貴族文化を映像化する時には、牛車の車種の使い分けには充分留意されたい。牛車の車種には、身分の表象や、それをわざと偽るストーリー展開などの意味がある。平安時代の貴族には常識だったはずの事象は、学ばねば、現代人の我々にはわからない。

さらに、一言。一九六〇年代の大映映画で絲毛車をそれなりに製作することができたのだから、さあ今こそ、最新の技術を活かして、白く美しい檳榔毛車を再現しようではないか。

この碩学に、こんな本が……

同志社大学名誉教授　竹居　明男

が出て、その並はずれた好奇心や、多彩な活動が明らかにされた。

『工商技芸　看板考』（哲学書院〈東京〉、明治二〇年一〇月発行）は、四六判、一〇六頁。著者二〇代半ばの出版で、小冊子ながら江戸の看板に関する専著として、多数の図版を添えて、看板の意匠や文言を解読している。同時代に同じく看板に着目したE・S・モースの仕事との比較も興味深い（図1）。

本書は、後に斎藤忠編『坪井正五郎集』下巻（日本考古学選集3）に再録されているので披見は難しくないが、架蔵本には「としだまのしるしまでに／さどやうじゆんくんへ　かきてより」という著者自筆の献呈辞がある（図2）。正五郎の父信良は佐渡家出身で、蘭医坪井信道の義子となっており、『幕末維新風雲通信』（東大出版会刊）四六〇～一頁掲載の「佐渡家系図」に見える一〇代目養順（敬吉）か一一代目養順（順吉）のいずれかに献呈されたものであろう。

高木敏雄（一八七六～一九二二）

は神話学者・民俗学者。『比較神話学』『日本神話伝説の研究』などの代表作があり、柳田國男とともに雑誌『郷土研究』を創刊した。

『伊太利紀行』（隆文館〈東京〉、大正三年五月七日発行）は四六判、本文七二四頁。言うまでもなく、ドイツの詩人・作家ゲーテの旅行記の翻訳で、原著は一八一六～二九年に刊行された。現在は岩波文庫三冊本（相良守峯訳）が普及しているが、本書は本邦初訳と思われる（渡邊雅弘編『日本西洋古典学文献史』一、参照）。

岩波文庫本の「解説」には先行訳としての本書に言及が無く、その位置付け等については未詳だが、高木敏雄は東京大学でドイツ文学の専攻であったことが想起される。

訳文は、例えば「吾輩は観測台から此町の見事な位置を極めて明瞭に見渡すことができた。北には雪を戴くチロルの連山が半身を雲に包まれてゐる。」（一一一頁）という調子で、やや古めかしいが、総ルビで意外と読みやすい。私事ながら、最近のコロナ禍の中、声帯の調子維持（？）のために音読一時間を日課としており、本書も気分よく音読にて読了した。

浅井虎夫（一八七七～一九二八）

は東洋法制史家。主著『支那ニ於ケル法典編纂ノ沿革』のほか、日本史関係では女官制度全般の体系的かつ克明なる論述『女官通解』で名高い（後に講談社学術文庫収録）。また知る人ぞ知る『福原の都』は、いまだに福原京に関する唯一の専著で（『神戸史談』第二四六号参照）、神戸出身の著者ならではの著作と言えよう。

図1　『工商技芸　看板考』表紙

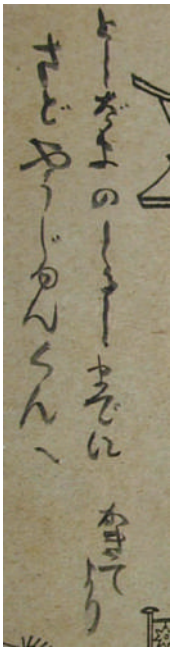


図2　献呈辞

その浅井には、さらに『**新京都めぐり　京洛の史蹟**』（緑猗軒〈神戸〉、大正四年九月八日発行）という著作がある（架蔵本は昭和五年三月二日付の三版）。四六判、本文四五七頁、函付。「汽車・電車・人車」の便を念頭に、京都市の内外に大別して（さらに南山城・奈良・大津等を「拾遺」として付加）、一日の行程を想定した細項目ごとに神社仏閣・名所旧跡等に説明を施す。例えば市外の「南方」の「東寺ゆき　吉祥院・鳥羽・安楽寿院」のごときで、図版・地図等は少ないながら、全体として歴史的説明が詳しい「読む京都ガイド」であるとともに、大正初年の京都を髣髴とさせうる点でも興味深い。古書店等での入手をお勧めしたい。

直良信夫（一九〇二～八五）

は古生物学者・考古学者。兵庫県明石市西八木海岸の更新世の地層から「石器」と人骨片を発見し、「明石原人」として話題を呼んだ（最近では、完新世の人骨との見方が有力）。例えば、高橋徹『明石原人の発見　聞き書き直良信夫伝』（朝日新聞社、一九七七年刊。後に教養文庫再録）に代表されるように、私などには「明石原人」のイメージが強いが、一方、著者晩年期の『学問への情熱』（佼成出版社、一九八一年刊）付載の「著作論文目録」にも明らかなように、専門書以外に一般書・啓蒙書・随筆等を含め、数十冊にも及ぶ著作がある。

そのうち『秋―科学随筆―』（一九四六年刊、架蔵）、『モズの生活』（一九四七刊）、『春―科学随筆―』（一九四九年刊）、『峠路―その古えを尋ねて―』（一九六一年刊、架蔵）等は、書名だけからでも異色の感が深いが、架蔵の中から今一冊『**蝙蝠日記**』（甲鳥書林〈東京・京都〉、昭和一八年一二月一〇日発行）をとりあげてみよう。

本書は四六判、本文四七三頁。ほぼ一年間にわたるコウモリの生態観察記録を、文字通り日記体で書き記したもの。特に「飛翔生活」を中心としているのには訳があって、「此の獣の一切を再検討し、頑敵英米を撃ちこらすための、最新最精鋭兵器の製作に、専念しなければならない事の、必要であることを、切々に私は痛感するものである。……新案兵器の考案製作に急を要する現下にあつては、何事かのお役に立つ、暗示力をもつてゐる事だろう。」（以上「自序」より）という次第であった。しかし、その観察は至って冷静であり、巻末の短編集「蝙蝠雑輯」（三九三～四七三頁）には「古代日本人と蝙蝠」といった項を設けて目配りの広さを示している。

築島裕（一九二五～二〇一一）

は、国語学者。平安時代を中心とした漢文訓読史の研究に大きな業績を挙げ、『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究』、『平安時代の漢文訓読語につきての研究』、『平安時代語新論』などの代表作がある。

もともと、その専門からして資料収集のため全国を旅する機会が多く、その過程で鉄道切符に興味をもち、三〇年間で、その数「十万に近い」というから驚く。こうした成果に基づいて一書に纏められたのが『**切符の話**』（真珠書院〈東京〉、昭和四三年九月五日発行）である。四六判、本文一三〇頁。同じ趣味を有し、協力者でもあったという長沢規矩也（一　九〇二～八〇）の序を付す。図版も多数収められ、我我世代には懐かしいが、今や絶滅に瀕している紙の切符をめぐる、楽しくも珍しい書物である。

＊　＊　＊

最後に、最も生年は早いが、英国の言語学者**バジル・ホール・チェンバレン**（一八五〇～一九三五）をとりあげて結びとしたい。

彼は、いわゆる御雇外国人として海軍兵学校、ついで帝国大学文科大学で教鞭をとり、日本語・日本文学、さらに広く日本の文化や歴史の研究・紹介に従事した。東洋言語学関係の著作のほか、『英訳古事記』は著名で、日本文化百科『日本事物誌』（東洋文庫に翻訳2冊所収）も評価が高い。

彼には、『**鼠はまだ生きてゐる**』という風変わりな書名の著作がある（原著は一九三三年刊。吉阪俊蔵訳が岩波新書赤版にあり、一九三九年発行。なお一九八〇年発行の復刻私家版『東西随想録』もあり、私はこれで読んだ）。書名は、中世フランス人の詩の一節に由来し、スイス隠棲中の晩年期に、故国の新聞が誤って二度にわたって「故チェンバレン」と記したことへの抗議を込めて、このような題名の随想録を刊行したのであった。なお、楠家重敏作の、チェンバレンの詳細な評伝も『ネズミはまだ生きている』（雄松堂出版、一九八六年発行）と題されている。

さて本書は、随想録とはいえ、多くの短章からなり、その中に次のような文章がある。

「未来は決して過去を繰返すものではない。しかし過去は我々が未来を予見するために有する唯一の規準である。」

「堕落した文明人以上に恐るべき野蛮人があるか？」

これまで三年に及ぶコロナ禍や、現下の国内外の情勢に鑑みて、これらの文章は、いよいよ我々の心に沁み通って来るものがあるように思われる。

（**当協会理事**）

五島列島に入唐航路を訪ねる（下）

滋賀県立大学名誉教授　田中 俊明

さて、最澄・空海は、延暦の遣唐使として入唐した。大使は藤原葛野麻呂で、帰着した延暦二四年（八〇五）六月乙巳（八日）の『日本後紀』の記事によれば、「遣唐使第一船、對馬嶋下縣郡に到り泊まる。大使從四位上藤原朝臣葛野麻呂上奏して言えらく、臣葛野麻呂等、去年七月六日、肥前国松浦郡田浦從り發し、四船にて入海し、七日戌剋、第三第四兩船、火信應ぜず。死生之間を出入し、波涛之上を掣曳し、都て卅四箇日。八月十日に福州長溪縣赤岸鎭巳南の海口に到る」とある。福州の赤岸鎭に到着したのは、大使の乗る第一船であり、空海も同船していた。最澄は、そこには記されていないが、副使石川道益とともに第二船に乗り、明州鄮県に着いている。また、判官高階遠成が第四船は乗っていたが、なんとか遅れて越州に着いており（再派遣説もある）、のちに空海が帰るときに、その帰国の船で帰っている。空海は留学僧であり、ほんらいは二十年滞在しなければならなかったが、長安の青龍寺で恵果に会い、伝法阿闍梨位の灌頂を受け、恵果の勧めもあり二年余で帰国することにしたのであったが、高階遠成の船がなければ、三二年後の円仁の入唐した承和の遣唐使を待たなければならなかった。帰国できずに客死していたかも知れなかったのである。

この延暦の遣唐使は、上記のように、往路は「松浦郡田浦」を出るときまでいっしょであったが、出発した翌日にはバラバラに離れてしまったようである。

図１　雄嶽日枝神社（下社）

「松浦郡田浦」について、先の合蚕田浦と同じであるというみかたもあるが、そうではないという意見もあり、そのなかには、平戸島の北西の大久保の田の浦にあてる考えもあり、現地には、巨大な空海像がはるか唐を眺めるかたちで立てられている。その考えに立てば、往路においては、五島に寄っていないということになる。

最澄は、請益僧であり、台州・天台山・越州で、高僧から学び、経典を多く写し、帰りは遣唐使第一船に同船して帰っている。それは上記のように対馬の下県に着いている。従って、「田浦」がどこであるかによっては、最澄は五島に立ち寄っていないことになるが、田浦は五島である可能性が高いので、往路には田浦を出る以前に五島に寄っていたことになる。もっとも、延暦寺における伝記によっては、帰路も値嘉島に寄ったとするものがあるようである。山王山は、最澄が帰国後、無事に入唐できたことを感謝して山王神を勧請したという。麓に雄嶽日枝神社（下社）があり、そこに遙拝所もある。白鳥神社にも、最澄が自作の観音像を奉納したという伝承がある。最澄は、帰国後、八一二年に九州に行って宇佐八幡宮や香春の神宮寺など参詣しており、その時に、五島にも足を運んだというみかたもあるが、確証はない。

空海も往路は同じく田浦しだいであるが、三井楽の柏崎に「辞本涯」碑が立てられている。その地美彌良久は、そこを離れれば、一路、大海を経て、中国大陸である。まさにそのあたりで、「本涯を辞す」との感慨を持ったとしてもおかしくはないが、上記のように田浦を出て、すぐに沖に出たものと考えられ、遠望はしてもその地に立って、という感慨ではない。その言葉は、大使らとともに赤岸鎭に漂着して日本からの遣唐使と認められなかったとき、大使の代筆として書いた文章（「大使の爲に福州の観察使に与ふる書」『遍照発揮性霊集』）のなかにみえるもので、大使の感慨という形になっている。それはどちらでもよいが、ある特定の地点に立って、ということではなく、日本国を離れて、という意味としてとらえるのがよさそうである。

空海の帰国は、上記のように高階遠成の船で、往路も同船していた橘逸勢もいっしょであった。しかし航路の明確な記録がなく、五島に立ち寄ったかどうかわからないが、五島には、空海の旧跡が多い。それは全国どこでも、というべきであるが、福江では、往路に寄った明星院・帰路に寄った大宝寺。大宝寺は、西の高野山と称している。中通島の道土

図２　西の高野山　大宝寺

井の弘法井戸などの伝承地。ただし、そうした寺の縁起や伝承地などをもとに、五島での行動を追究することがどこまで有効であるのか、それほどの資料価値があるといえるのか、問題はある。

◇奈留島

福江や中通のなかの最澄・空海など入唐僧の痕跡については、以上のとおりであるが、福江と中通のあいだにある奈留島についても、少しくみておきたい。

帰国後、山科の安祥寺を開基した恵運は、往復ともに奈留島に寄っている。『安祥寺伽藍縁起資材帳』によれば、承和九年（八四二）に「博太津頭」で上船し、「肥前国松浦郡遠値嘉嶋那留浦」に到着し、船主李処人らがそこでそれまでの船を棄てて新たな船を造り、三箇月かかり、八月二四日に出帆した。六日かかって温州楽城県玉留鎮府前頭に着いた。那留浦は、奈留島の港であるが、奈留島には、南向きに奈留島港が開いている。また北側に船廻湾と相ノ浦湾という北向きの入江が隣り合っている。東シナ海側は海が荒れることが多く、逆に、五島列島の東側、五島灘は静かなので、奈留島の港も、南に開いた現在の奈留島港のほうで考えるみかたもある。しかし、先に挙げた合子田浦や三井楽は、いずれも東シナ海側であるから、前後そちらを通りながら、奈留島はわざわざ南側に向かったということになる。距離的にみても、大きく迂回するルートということになり、不自然に思える。北に開いた、船廻湾または相ノ浦湾でいいのではなかろうか。

恵運は三箇月、五島に滞在していたことになる。帰りも大中二年（八四七）六月二一日に唐人張友信・元静らの船で明州望海鎮頭を上帆し、わずか三日で「値嘉島那留浦」に到着している。

『続日本後紀』の承和一四年（八四七）七月辛未（八日）条には、「天台留學僧圓載、傔従仁好及び僧惠蕚等、大唐自り至る。圓載之表状を上奏す。唐人張友信等四十七人同乗して來著せり、と。」とあり、同じ船とみられる。つまり圓載・恵蕚らといっしょであった。

図３　船廻湾（奈留島）

円珍は、仁寿三年（八五三）七月十五日（もしくは十六日）、博多で「大唐商人」王超の帰国する船に乗って出発した。博多へは、前々年の五月二四日に大宰府に到着し、城山の四王院に寄住し、王超の出発を待っていた。従者は八人で、その中には、かつて円仁と同行して、長く長安に滞在した丁満も、この時は訳語して同行していた。王超は、仁寿三年二月十一日付けの大宰府の公験では、「大唐商人」としているが、「乞台州公験状」には「新羅商人」としている。おそらくほんらい新羅人で、唐を拠点にして交易活動をしており、時に大唐商人と称したり、新羅商人と称したりしたのであろう。船は「値賀島に到り、鳴浦に停泊」した（行歴抄）。鳴浦は、奈留島の港である。ここに八月九日まで滞在し、おそらく三井楽を経て、唐に向かった。三井楽は停泊したわけではない。奈留島の港に着いて、二十日余り風待ちをしたのであったが、その間、どこに泊まったのかはわからない。明州などに向かったのであろうが、流されて台湾につき、その後、福州を経て、台州に向かい、天台山にのぼった。

奈留島に寄った僧侶はほかにもいるが、とりあえずその一部は確認することができた。北に向いた船廻湾と相ノ浦湾とはともに深い入り江であり、奈留島に寄ったとして、いずれかを特定するのは難しいと思えるが、両者は近く、いずれを想定しても、航路全体として大きくはずれることはない。

（完）

（当協会客員研究員）

公開講演会の開催

八月二八日（日）京都府立京都学・歴彩館大ホールに於いて、歴彩館共催　二〇二二年度古代学協会公開講演会「京都の天皇陵」を開催しました。

新型コロナ第七波のなかではありましたが、一五五名のご参加がありました。大ホールのゆったりとした環境においてお聴きいただけたのではないかと思います。

▲朧谷壽理事長

朧谷壽古代学協会理事長（同志社女子大学名誉教授）の開会挨拶に続き、山田邦和講師（古代学協会理事・同志社女子大学教授）が「平安時代初期の天皇陵―桓武天皇陵を中心に―」を講演。平安王朝の始祖として崇められた桓武天皇の陵墓を中心に論じられました。桓武天皇陵は中世以降には所在地すら不明となってしまいましたが、幕末の学者の推定に基づき、明治時代に現在の場所に定められました。しかし、信憑性に乏しく、丁寧に陵墓史の全体像を通観しながら、本問題解決の糸口を探る内容となりました。

次に、高木博志講師（京都大学人文科学研究所教授）の「近代天皇制と泉涌寺陵墓群」は、一般に皇室の菩提寺「御寺」としての印象をもつ泉涌寺をとりあげられました。幕末の孝明天皇の葬儀以降、神仏分離を先取りした同寺でしたが、明治十年代になって国家神道の皇霊祭司のもとで、皇室の私的な仏教信仰が許されたことによって平安京全体の菩提寺としての泉涌寺像は、近代に創り出されたものであったことを明らかにされました。

その後、両講師による対談が行われました。

受講された皆様からは、「新しい知見を得られて有意義な時間でした」「興味深いテーマで楽しく聴かせてもらいました」「対談が大変面白かった」「また歴彩館で開催してほしい」等のお言葉を頂きました。

今後も皆様からの要望を反映して興味を持ってご参加いただける催事を企画して参りたいと思います。

共催を賜りました京都府立京都学・歴彩館並びに関係者の皆様にも心より御礼申し上げます。

出版だより

当協会顧問・米田雄介先生（神戸女子学院名誉教授・元正倉院事務所長）の『歴代天皇の皇位継承事情』（柳原出版）が刊行された。

米田先生はこれまで歴代天皇の事蹟に関する研究に邁進され、二〇一九年には『令和新修　歴代天皇・年号事典』（吉川弘文館）も上梓された。

今回のご著書を上梓されたきっかけは、「どのような方が、どのような状況のもとに皇太子に冊立され、皇位についたのか。皇太子といえども必ずしも皇位を継承してはいない。その理由とは何なのか。そもそも皇太子とはいかなる存在なのか検討したい」という着想をもたれたことによるものとうかがっている。

皇位継承問題が取り沙汰される昨今、故きをたずね、皇位継承について学ぶにふさわしい一書といえるのではないだろうか。

柳原出版、四六判　ソフト上製（ケース入）、本文五六六頁、本体九〇〇〇円＋税

ISBN：978-4-8409-5030-5

発行者　公益財団法人　古代学協会
604-8131
京都市中京区三条通高倉西入ル
菱屋町四八
電話〇七五－二五二－三〇〇〇
発行日　令和四年十二月二十日
印　刷　明文舎印刷株式会社